

「2025年度ベトナム国家大学ハノイ校サマープログラム派遣参加報告書」

京都大学総合人間学部3年 吉田 健悟

今回の留学プログラムに参加する以前は、漠然と大学生のうちに海外に行ってみたいという程度であったが、実際留学することで、現地で異なる言語、文化に囲まれて生活することによる異なる価値観の需要、理解につながると感じ、大学在学中に再び留学をしてみたいという意欲が湧いた。

3 回生ともなると、積極的に外部と関わろうとしない限りは自分の専門分野に近い先生方や学生としか交流する機会がないと感じるが、このように留学を通して、全く異なる分野を学ぶ学生との交流を通じて、見識の広がりを感じられ、また、大学での学習に関しても他者とのさらなる交流や社会の役に立つための研究というような目的意識を持つという意識が芽生えた。

元々国際理解に関しては、大学入学直後から留学生との積極的な交流を通じて関心があるテーマであったが、初めて英語がほとんど通じない国を体験することで、国際理解のためには現地の言語を理解しようとするのが、非常に重要な役割を持つということに思い至った。

今回の留学プログラムが自分の初の海外渡航であった。唯一苦戦した点といえば、やはり言語の壁である。首都ハノイといえど、大規模な商業施設でもない限り日本語はもちろん英語も通じず、日本人学生のみで外出するには翻訳アプリが必須であった。一方、そういった環境だからこそベトナム語を積極的に使おうという意識が芽生え、プログラムの後半になると、現地語のみで書かれた飲食店のメニューも大体理解できるようになった。

衛生面や治安に関しては、想定したよりも高い水準であり、敏感にならなければいけない場面はほとんどなかったように感じる。物価に関しては日本よりも各段に安いと、つい衝動的に購入しそうになることもあったが、現地の学生に相場を聞いて、値引きの交渉を行ったことも貴重な体験であった。

またベトナムで特筆すべきは交通に関してであるが、バイクの交通量や渋滞の時間帯、歩行者の動きなど日本と異なる点が多いものの、「郷に入っては郷に従え」の精神で過ごせば存外早く慣れることができたので、やはり現地で実際に身をもって体験することの重要性を思い知った。

プログラム内容に関して、渡航前の事前語学授業では、内容が日常生活で実践しやすい単語、会話表現に絞られていたため、現地で非常に役立ち、実際に使うことができた。またベトナム語は日本人にとって慣れない発音体系であり、ベトナム人の学生から直接教えてもらうことで、ネイティブの発音を学ぶことができた点は良かった。

ULIS では、基礎的なベトナム語の授業やベトナムの若者が実際使っているスラングを現地の学生と共に学ぶことで、ネイティブの発音をじっくり習うことができると同時に現地の文化も学ぶことができた。学生と講師の年齢が近いということもあってか、授業中の雰囲気も日本の大学のそれとは違い、カジュアルで楽しく学ぶことができたのは非常にいい経験になった。

USSH では、ベトナムの大衆文化や法律・行政システム、ベトナムの観光経済についての学習をした。大衆文化は占領の歴史と、法律・行政は政治的思想と絡む点が多い部分が興味深く、講師の先生方への個人的な質問を通して、より内容を深く知ることができた。

Tràng An や Hoàng Thành Thăng Long、Làng cổ Đường Lâm ではツアーガイドの方や同行してくれた現地の学生、教授によって、様々な伝説や歴史を学ぶことができた。驚いたことは、ガイドや教授はもちろんながら探訪先について詳細な知識を持っているのだが、同行した学生も同様に詳しい知識を披露してくれたことである。事前に勉強してきてくれていた学生もいたのを見ると、ベトナム人の国民性を伺い知ることができたと同時に、自分が逆の立場だったらできるだろうかと内省することにもつながった。

共同発表では日越の若者の政治意識の比較という少しばかりセンシティブなテーマを取り扱い、現地の学生、先生方への質問やインタビューでは配慮しつつも、自身の興味・関心に従って切り込んだ部分も聞いた。思ったような返答がないこともあったが、一方現地で直接インタビューをしたことでしか得られない貴重な生データを得ることができたので、価値のある体験をすることができたと感じる。また、留学の時期がベトナム建国記念日の直後であったため、学生をはじめとした現地の方々の愛国心も高まりや独特の雰囲気を感ずることができたことは幸いであった。

進路に関して、プログラムに参加する以前は海外での活動は視野には入れていなかったが、現地で日本語を勉強する学生との交流を通じて、海外の大学や塾で日本語・日本文化を教えるという仕事に興味を湧いた。元々今回のプログラムに興味を持ったきっかけは、友人が海外ボランティアでベトナムでの日本語を教えたという体験に感銘を受けたからであるが、日本語教師という職業や海外で教員として働くことを通して、異国の文化と同時に自国の文化にもより理解を深めることができると感じる契機となると考える。(2,067 字)